

その他(研究ノート等)

看護学生におけるボランティア活動に対する意識の学年比較

柿原 加代子¹, 市江 和子¹

On Survey of Comparison of Contents about Volunteer Activity among Nursing Students

KAKIHARA Kayoko, ICHIE Kazuko

キーワード：ボランティア活動、看護学生、意識調査、支援

Key Words : Volunteer Activity, Nursing Students, Survey, Support

要旨

本研究の目的は、A短期大学の学生の意識調査から、ボランティア活動の実態を把握し、現状や問題点を明らかにすることである。

調査対象はA短期大学の看護学生である。同意の得られた223名中210名(回答率90.1%)から回答を得た。1年生75名(92.6%)、2年生69名(94.5%)、3年生69名(95.7%)であった。調査内容は、学生の背景、ボランティアに対する関心および参加意識、活動に関する内容、満足感等で、単純集計と χ^2 検定により学年比較を行った。

結果として、全学年でボランティア活動への参加意識が高かった。1年生に、参加意識が高く、ボランティア活動への参加体験が多かった。体験した活動分野は、「高齢者や障害者に対する介護や身の回りの世話などの社会福祉に関する活動」や「環境美化、リサイクル活動など自然・環境保護に関する活動」であった。全学年で、学業との両立ができないという問題が最も多かった。

以上から、ボランティア活動に対する支援策として、①ボランティア活動への参加意識を高めるため、カリキュラムの検討やボランティアコーディネーターを配置する、②ボランティア活動と学業との両立のためにボランティア活動の紹介や情報提供を行う、などの必要性が示唆された

¹日本赤十字豊田看護大学

受付日：2004年9月1日

採用日：2005年1月13日

I. はじめに

現在、看護系大学・短期大学においては、ボランティアに関する内容を授業科目として位置づけたり、専任のコーディネーターを配置するなど、学生のボランティア活動を支援する組織的な取り組みがみられるようになった。

看護教育におけるボランティア活動の実態調査では、学生のボランティア活動に対する意識や活動体験による教育的意義等について報告がされている。看護系学生と福祉系学生のボランティアに関する意識の比較では、双方ともに関心が低かったという結果がみられている（深沢ら，1994，p.102）。活動上の問題については、活動を継続する上での様々な問題を抱えており、それらを踏まえた教育的関わりの必要があるともされる（岩田ら，1997，p.41）。

岩田によると、ボランティア活動体験による教育的意義について、学生は活動を通じ、「体験の広がり」、「自己理解の機会」、「他者理解の深まり」など、看護の対象の理解を深め、自らの看護観を培う機会となり、看護学生としての成長にボランティア活動が教育的価値を秘めていると述べている（岩田，1998，pp.23-29）。

本稿では、こうした現状を踏まえ、看護学生におけるボランティア活動の意識と現状について学年比較による分析を試みた。今回、ボランティア活動を阻む問題を把握し、ボランティア活動が継続され、教育的機能が促進されるような支援策について検討したので報告する。

II. 調査方法

A. 目的

A短期大学の学生の意識調査から、ボランティア活動の実態を把握し、現状や問題点を分析することで、学生のボランティア活動への支援のあり方について考察する。

B. 対象および方法

調査対象はA短期大学の看護学生で調査の同意が得られた223名（1年生75名、2年生69名、3年生69名）である。調査期間は2000年5月であった。同意を得られた学生に対して講義室を使って

調査紙を配布し、回収した。210名（回答率90.1%）から回答が得られ、学年別では1年生75名（92.6%）、2年生69名（94.5%）、3年生69名（95.7%）であった。ボランティアに対する意識について単純集計と χ^2 検定により学年比較を行った。

C. 調査内容

調査内容は、学生の背景、ボランティアに対する関心および参加意識、活動に関する内容、満足感等である。

D. 倫理的配慮

調査にあたり研究者が学生に対し、成績には影響がないことを説明した。また、この研究への参加は自由意思であることを調査表に明記して配布し、記載後に無記名で回収した。

III. 結果

対象者の平均年齢は、1年生19歳（SD = 1.5）、2年生19歳（SD = 0.9）、3年生20.1歳（SD = 1.2）であった。

1. ボランティア活動に対する関心（図1）

ボランティア活動に対する意識として、「どの程度関心をもっているか」では、1年生では「非常に関心をもっている」19名（25.3%）、「ある程度関心をもっている」45名（60.0%）であった。「あまり関心をもっていない」は3名（4.0%）、「関心をもっていない」1名（1.3%）であった。2年生では、「非常に関心がある」2名（2.9%）、「ある程度関心をもっている」39名（56.5%）であった。「あまり関心をもっていない」は8名（4.2%）と少数で、「関心をもっていない」はいなかった。3年生では、「非常に関心がある」1名（1.5%）、「ある程度関心をもっている」40名（60.6%）であった。「あまり関心をもっていない」8名（12.1%）、「関心をもっていない」6名（9.1%）であった。

2. ボランティア活動に対する参加への気持ち（図2）

全学年で、関心の有無にかかわらず「参加したい」者がほとんどで、「参加したくない」とした者は少数であった。

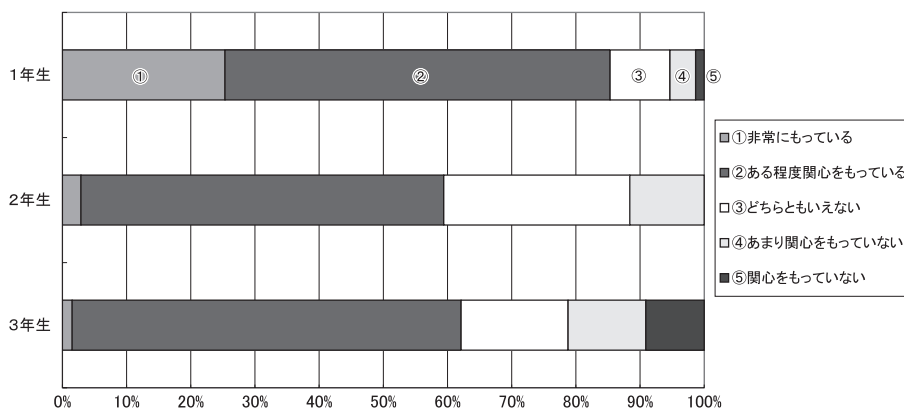


図1. ボランティア活動に関する関心

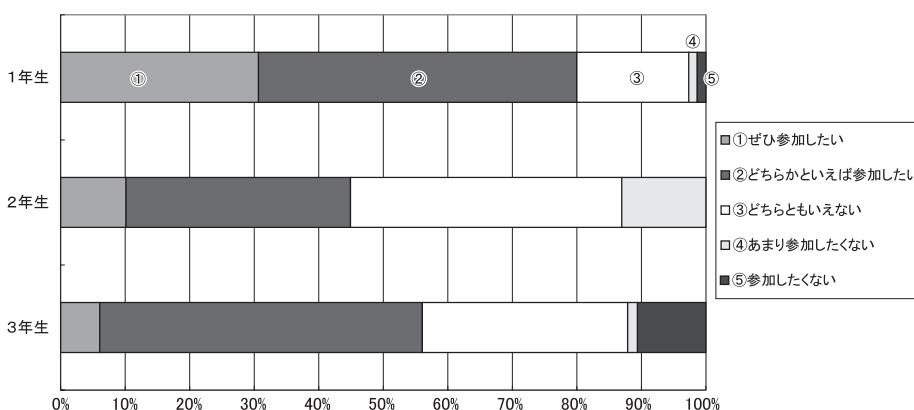


図2. ボランティア活動に参加したい気持ち

1年生では、「是非参加したい」23名(30.6%)、「どちらかといえば参加したい」37名(49.3%)で、参加したい者が約80%であった。2年生では、「是非参加したい」7名(10.1%)、「どちらかといえば参加したい」24名(34.8%)と参加したい者が約45%であった。一方、「どちらともいえない」29名(42%)、「あまり参加したくない」9名(13.0%)であった。3年生は、「ぜひ参加したい」4名(6.1%)、「どちらかといえば参加したい」33名(50.0%)で、参加したい者が約60%であった。「どちらともいえない」21名(31.8%)、「余り参加したくない」1名(1.5%)、「参加したくない」7名(10.6%)であった。

3. ボランティア活動への参加体験

これまでのボランティア活動への参加経験では、1年生が参加した経験が最も多く、45名(60.8%)であった。2年生、3年生では、「以前参加したことがある」、「参加したことがない」が共に約30%づつを占め、ほとんど同じ傾向であった。

4. 活動体験と参加への意識

ボランティア活動の体験がある者は、ボランティア活動に関心があり、今後も活動したいという意識がみられた(表1)。また、活動への関心には学年間の差がみられ、学年が低い方がボランティア活動への関心は高かった。

表1. ボランティアの参加状況と関心 (n=216)

	現在活動をしている		以前活動をしていた		全く活動をしたことがない	
①非常に関心をもっている	6	(27.3)	14	(63.7)	2	(9.0)
②ある程度関心をもっている	11	(8.6)	69	(53.9)	48	(37.5)
③どちらともいえない	1	(2.5)	17	(42.5)	22	(55.0)
④あまり関心をもっていない	0	(0)	6	(31.6)	13	(68.4)
⑤関心をもっていない	0	(0)	2	(28.6)	5	(71.4)

名 (%) $p < 0.001$
 $\chi^2 = 38.53$

表2. 活動していた分野 (複数回答)

項目	1年生		2年生		3年生	
	人数	%	人数	%	人数	%
①環境美化、リサイクル活動など自然・環境保護に関する活動	26	34.7	11	15.9	18	27.3
②地域の伝統文化やお祭りなどを守り育てる活動	4	5.3	5	7.3	5	7.6
③子どもたちにスポーツ、レクリエーションなどの指導を行う活動	3	4	6	8.7	7	10.6
④自主防災活動や災害援助活動	3	4	7	10.1	1	1.5
⑤募金活動、チャリティバザー	18	24	12	17.4	12	18.2
⑥交通安全に関する活動	1	1.3	0	0	0	0
⑦病院でのボランティアなどの保健・医療・衛生に関する活動	2	2.7	9	13	8	12.1
⑧公民館における托児、博物館の展示説明員などの指導などの公共施設での活動	2	2.7	0	0	1	1.5
⑨自分の知識を活かした人々の学習活動に関する指導、助言、運営協力などの活動	23	30.7	0	0	1	1.5
⑩老人や障害者などに対する介護や身の回りの世話などの社会福祉に関する活動	3	4	12	17.4	18	27.3
⑪難民援助、留学生援助、技術援助などの国際交流(協力)に関する活動	0	0	2	2.9	7	10.6

5. 活動していた分野 (表2)

入学前までに活動していた分野について、選択肢を設定し回答を求めた。

全学年で、「高齢者や障害者などに対する介護や身の回りの世話などの社会福祉に関する活動」、「環境美化、リサイクル活動など自然・環境保護に関する活動」が多かった。

1年生では、「環境美化、リサイクル活動など自然・環境保護に関する活動」26名(34.7%)、「高齢者や障害者などに対する介護や身の回りの世話などの社会福祉に関する活動」23名(30.7%)であった。2年生では、「募金活動」、「チャリティバザー」12名(17.4%)が最も多かった。3年生も、「高齢者や障害者などに対する介護や身の回りの世話などの社会福祉に関する活動」、「環境美化、リサイクル活動など自然・環境保護に関する活動」18名(27.3%)と、1年生と同様な内容が多かった。

6. 活動開始時の問題点

ボランティア活動を始める時問題になりそうなことは、「学校や仕事が忙しく両立ができない」が全学年で多かった(表3)。ボランティア活動に関する情報提供では、2・3年生と比べると1

年生に情報が不足しているとした者が多かった($p < 0.05$) (表4)。

IV. 考察

ボランティア活動に対する関心や参加意識は、1年生が2・3年生よりも高い傾向であった。その理由として、1年生は2・3年生に比較して、入学時までにボランティア活動を体験した者が多いことが要因と考えられる。また、本学へ入学した直後で、学生生活への期待のあらわれとも推測する。ボランティア活動への参加意識は、ボランティア活動を一度でも体験したことのある者では、その後の参加意向が強く、活動経験が次の参加を促す傾向があることが指摘されている(総務省青年対策本部(1993, pp.28-29)。したがって、1年生に関心や参加意識が高いことは、これまでの経験を更に積み重ねたいという意識とも言える。義務教育でボランティアに対する教育を受けた学生達の意識が、入学時のボランティア活動への関心や参加意識にも反映されているとも考えられる。

ボランティア活動への参加意識を継続し高めていくためには、カリキュラムの中でボランティ

表 3. 活動開始時の問題点 (複数回答)

項目	1 年生		2 年生		3 年生	
	人数	%	人数	%	人数	%
①学校や仕事が忙しく両立できない	38	50.7	58	84.1	52	78.8
②情報が不足している	37	49.3	22	31.9	25	37.8
③友人関係がうまくいかない	0	0	4	5.8	2	3
④やりたいと思う活動がない	8	10.7	11	15.9	11	16.7
⑤活動資金がない	19	25.3	16	23.1	25	37.8
⑥活動に要する技術や知識を持っていない	28	37.3	32	46.4	16	24.2
⑦事故に遇うなど安全の問題が心配である	7	9.3	5	7.3	5	7.6
⑧親の理解が得られない身近に相談できる人やリーダーがいない	4	5.3	0	0	1	1.5
⑨先生や職場の人の理解が得られない	1	1.3	0	0	1	1.5
⑩その他	1	1.3	1	1.5	0	0

表 4. ボランティア活動を始めた時の問題点 (n=212)

	情報が不足している			
	思わない		思う	
1 年生	36	(48.7)	38	(51.4)
2 年生	48	(67.6)	23	(32.4)
3 年生	41	(61.2)	26	(38.8)

名 (%) $p < 0.05$
 $\chi^2 = 6.74$

ア活動を実践する意義や方法について指導することや、課外活動を拡大し、ボランティア活動を積極的に取り入れていくこと、ボランティア活動を支援する指導者もしくはリーダー的な存在、例えば、ボランティアコーディネーターを配置することも必要と考える。特に、ボランティアコーディネーターを設置することで、活動に役立つ情報や資源を提供し、ボランティア活動をする側と受け入れる側を結びつけることができる。活動上の問題について学生同士が問題意識を共有する場を作り、解決策を模索し互いの学びや新たな課題の発見を促進するなど可能となる。

学生の実施している活動分野は、「高齢者や障害者などに対する介護や身の回りの世話などの社会福祉に関する活動」、「環境美化、リサイクル活動など自然・環境保護に関する活動」が多かった。高齢者対策や環境問題は、看護学においても重要な位置づけにあり、看護の対象や健康問題に直接触れる体験は教育的意義が大きいと考える。さらに、活動分野を拡大し見識を広げることも重要と考える。

活動開始時の問題点として、「学校や仕事との両立ができない」が全学年で多かった。これは、青少年のボランティア活動未経験者の認識（経済企画庁、2000、p.31）と同じ傾向であった。青

少年のボランティア経験者の報告（経済企画庁、2000、pp.32-33）によると、約60%が「学校あるいは仕事と両立する」としている。両立できる理由には、「学校や会社の休日に活動している」（66.9%）が多かった。特に学生では、「学校の休日」あるいは「学校の夏休みなどの長期休暇中」に活動していた。一方、両立しない理由には、「学校や仕事の時間の調整がつかない」が約9割と最も多かった。「学校や仕事の時間が忙しい」が5割以上という経験者の結果からも、時間的な問題は学生生活において大きいことがうかがえる。

本調査結果では、1年次よりも2・3年次と学年の進行によりボランティア参加意識が低下する傾向が見られ、ボランティア活動と学業の両立が困難とした学生も多かった。その原因として、学年が進むにつれて実習が多くなることで時間的な余裕がなくなり、心身の余力も少なくなってしまう現実があると考えられる。そうした看護学生の現状から、できるだけ休日や長期休暇中を有効利用したボランティア活動の紹介など、情報提供を積極的に行っていくことが必要であろう。

V. おわりに

看護学生の入学後におけるボランティア活動に対する意識を調査し、ボランティア活動への積極的な意欲が示された。ボランティア活動を行うことは、青年期の成長発達につながり、看護専門職を目指す者としての資質を培うことにも役立つと考える。本研究の限界は、一校の調査のため十分な分析検討までには至らなかったことである。今後、更に対象校を広げ検討を重ねていきたい。

文献

- 深沢圭子他（1994）. 学生のボランティアに関する意識－医療系学生と福祉系学生の比較－, 北海道公衆衛生学雑誌, 8（1）特別付録号, 102.
- 岩田みどり他（1997）. 看護教育とボランティア（第一報）, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要（10）, 41.
- 岩田みどり（1998）. 看護教育とボランティア（第二報）－看護学生の体験報告から障害理解の構造を分析して－, 日本赤十字武蔵野短期大学紀要（11）, 23-29.
- 経済企画庁編（2000）. 国民生活白書－ボランティアが深める好縁－, 31.
- 経済企画庁編（2000）. 国民生活白書－ボランティアが深める好縁－, 32-33.
- 総務庁青少年対策本部編（1993）. 青少年とボランティア活動－青少年のボランティア活動に関する調査報告書－, 28-29.